

豆類主要輸出輸入国現地調査報告書 (インド)

(平成 24 年度及び 26 年度調査)

公益財団法人 日本豆類協会 委託調査

2015 年 6 月

アイ・シー・ネット株式会社

インドにおける豆類の生産流通消費の概要

アイ・シー・ネット株式会社では、公益財団法人日本豆類協会の委託を受け、インドについて我が国への豆類供給国としての今後の見通しを明らかにするため、2013年3月から10月にかけて現地における豆類の生産流通消費の実態を調査したので、その概要を報告する。

1 インドの概観

インドは、南アジア随一の328万7千平方kmもの国土面積と世界第2位の12億1,057万人（2011年国勢調査）の人口を持つ大国である。インドの陸地は、ほとんどがインド洋に突き出した南アジアの半島上にあり、南西をアラビア海に、南東をベンガル湾に区切られて7,000kmの海岸線を持つ。多くの地域では雨季が存在し、三つの季節、夏、雨季、冬に分けられ、雨季を除いてほとんど雨の降らない地域も多い。北インド・中央インドはほぼ全域に肥沃なヒンドスタン平野がひろがり、南インドのほ

ぼ全域はデカン高原が占める。国土の西部には岩と砂のタール砂漠があり、東部と北東部の国境地帯は峻険なヒマラヤ山脈が占める。気候は南端の赤道地帯からヒマラヤの高山地帯まで多様性に富む。

12億人を超える国民は、多様な民族、言語、宗教によって構成されている。州境を越えるとまったく違う言語が話され、それぞれの文化芸術があるため欧米ではよく「インドは国と言うより大陸である」と表現される。連邦公用語はヒンディー語、他にインド憲法で公認されている州の言語が21あり、識字率は74.04%である。中央政府とは別に各州に政府があり大臣がいる。主な言語だけで15を超えるためインド政府が発行する紙幣には17の言語が印刷されている。ヒンドゥー教徒が最も多く、ヒンドゥー教にまつわるカースト制度による差別は憲法で禁止しており、都市部での影響は薄まっているが、農村部では今でも影響は残っている。

2004年から高度成長期に入り2010年には2億4千万人と増加した反面、1日65ルピー未満で暮らす貧困人口は3億人を超えており、貧困に苦しむ人が多い国ではある

たばた まこと アイ・シー・ネット株式会社
シニアコンサルタント
おおにし ゆみこ アイ・シー・ネット株式会
社コンサルタント

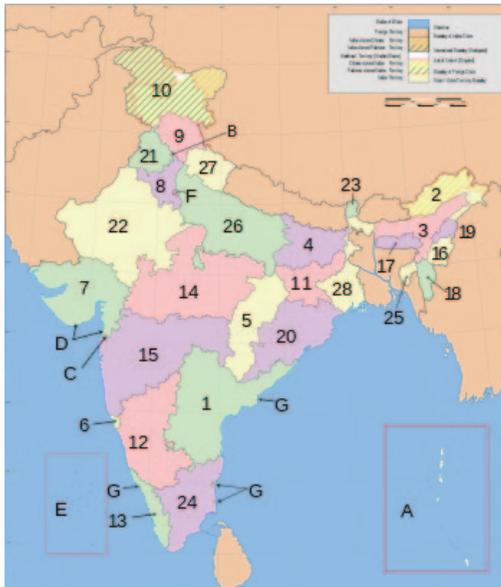


図1 インドの行政区分図

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1.アンドラ・プラデシュ州 | 19.ナガランド州 |
| 2.アルナチャル・プラデシュ州 | 20.オリッサ州 |
| 3.アッサム州 | 21.パンジャブ州 |
| 4.ビハール州 | 22.ラジャスタン州 |
| 5.チャッティスガル州 | 23.シッキム州 |
| 6.ゴア州 | 24.タミル・ナド州 |
| 7.グジャラート州 | 25.トリプラ州 |
| 8.ハリヤナ州 | 26.ウッタール・プラデシュ州 |
| 9.ヒマチャル・プラデシュ州 | 27.ウッタールカンド州 |
| 10.ジャンム・カシ米尔州 | 28.西ベンガル州 |
| 11.ジャルカンド州 | 〈連邦直轄領〉 |
| 12.カルナタカ州 | A.アンダマン・ニコバル |
| 13.ケララ州 | B.チャンディイーガル |
| 14.マディヤ・プラデシュ州 | C.ダードラー及びナガル・ハーヴェリー |
| 15.マハラシュトラ州 | D.ダマン・ディーウ |
| 16.マニプール州 | E.ラクシャディープ |
| 17.メガラヤ州 | F.デリー首都圏 |
| 18.ミゾラム州 | G.ボンディチェリ |

ものの、2004/05年度を対象とした調査の結果では、経済自由化後、貧困者比率が一貫して低下していることが確認されている。アジア開発銀行（ADB）が2011年に発表した予想によれば、インドの中間層が向こう15年間で人口の7割に達するとの見方もある。

2 インド農業の概観

インドの農業が経済全体に与える影響は、近年大きく低下している。農業は1990年には国内総生産（GDP）の30%を占めていたが、2011年度には14%となっている（表1）。他方で、労働人口の大半は

表1 農林水産業がGDPに占める割合

年度	1970	1980	1990	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
シェア	42.3	35.7	29.3	23.4	18.3	17.4	16.8	15.8	14.7	14.5	14.0

出所：インド中央統計局

表2 インドの穀物類の平均生産量（2005～2009年平均）

	平均生産量 (百万 t/年)	穀物に占める割合 (%)
米	94.02	42.4
小麦	77.04	34.7
雑穀	36.46	16.4
豆類	14.31	6.5
合計	221.83	100

出所：インド農業省

農業従事者であり、食品加工・肥料・農業機械など関連する裾野産業に与える影響が大きいため、同国では依然として農業を重要分野と位置付けている。

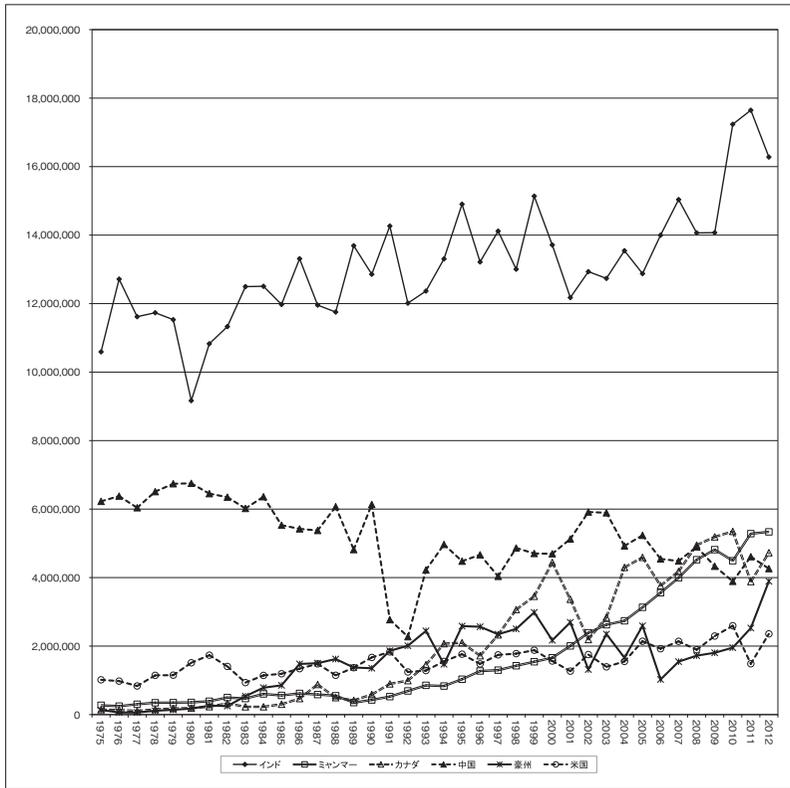
インドの耕地面積は1億5900万haとされており、世界の総耕地面積の11.3%（2008年度）を占めている。国土の大半が緯度の低い地域にあるため、気候は熱帯又は亜熱帯性である。北部のヒマラヤ、カラコルム両山脈地域は高所ツンドラ地帯、北西部は乾燥地帯、ガンジス川流域は亜熱帯、半島の大部分は熱帯に属する。また、同国は典型的なモンスーン気候帯に属しているため、季節風の変化により暑熱期（3～6月）、降雨期（6～10月）、温暖期（11～2月）に分類される。

インドは、豆類生産量の世界一を誇り、

同じくジャウトが生産量の60%を占める。米、小麦、落花生の生産は中国に次ぐ、世界第2位である。同国の主要農作物は米、小麦、雑穀、豆類、油糧種子である。米は穀物類の4割を占める（表2）。米の生産地は降水量の多い、西ベンガル州やタミル・ナド州など東部や南部、そして灌漑施設の普及が進んでいるパンジャブ州などである。小麦は、パンジャブ州やハリヤナ州といった北西部で主に栽培されている。

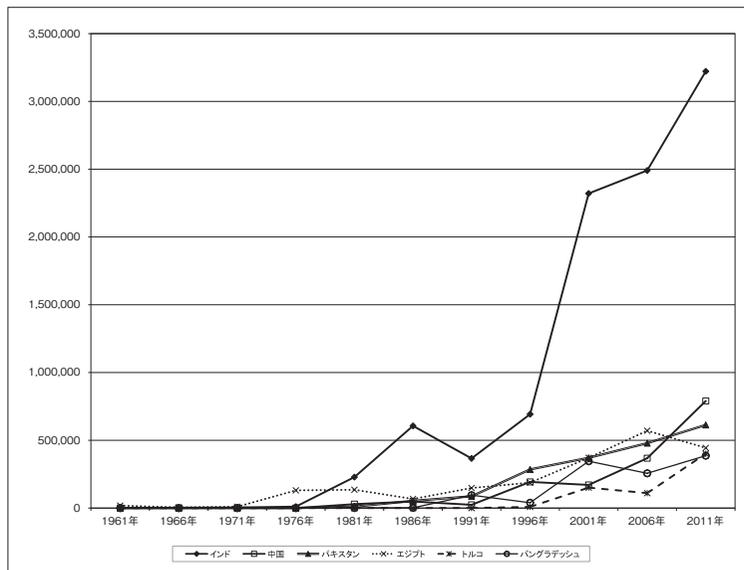
インド東部・南部は米の栽培が、北西部は小麦の栽培が盛んであり、それゆえに東部や南部の主食は米、北部や西部は小麦といった食文化が定着している。豆類や雑穀、油糧種子は、乾燥に比較的強く、年間降水量が少ない地域でも栽培が可能のため、灌漑施設の普及が遅れているマディヤ・プラデシュ州やマハラシュトラ州といった中央部や西部が主要生産地である。

1961年から2001年のインドの人口と食糧生産量を見ると、一人当たりの米と小麦の供給量が増えたのに対し、豆類の供給量が減っている。2009年度の一人当たりの年間豆類消費量は、都市部で9.6kg、農村部では7.9kgとなっており、インド政府が推奨する豆類の年間消費量29.2kgを大きく下回っている。このような状況を受け、インド政府は1990年代より同国における豆



出所：FAOSTAT

図2 主要国の豆類の生産量の推移 (万t)



出所：FAOSTAT

図3 主要国の輸入量の推移 (万t)

表3 豆類の生産量 (千t)

年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
生産量	14,905	13,130	13,384	14,198	14,762	14,566	14,662	18,241	17,089

出所：インド農業省

表4 豆類の栽培面積と生産量 (2011年度)

州	作付面積 (千ha)	生産量 (千t)	順位
マディヤ・プラデシュ	5,186	4,162	①
ラジャスタン	4,458	2,432	②
ウッタル・プラデシュ	2,421	2,403	③
マハラシュトラ	3,273	2,268	④
アンドラ・プラデシュ	1,931	1,230	⑤
カルナタカ	2,303	1,134	⑥
グジュラート	957	780	⑦
ビハール	524	511	⑧
チャッティスガール	814	499	⑨
ジャルカンド	466	412	⑩
タミルナド	669	369	
オリッサ	729	343	
その他	732	545	
合計	24,463	17,088	

出所：インド豆類研究所

表5 豆類の平均単収 (kg/ha)

年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
単収	543	635	577	598	612	625	659	630	691	699

類の増産に力を注いできた。

1993年には国内の豆類増産を目的としたインド豆類研究所 (Indian Institute of Pulse Research) が設立された。同研究所は現在、全国豆類調整事業 (All India Coordinate Projects : AICP) と称される豆類の増産と豆農家の所得向上を掲げ、全国の農業大学や州農業局、研究機関が参加する事業を統括している。AICPでは、①ヒヨコマメ、②キマメ、③その他主要豆類 (緑豆、ケツルアズキ、レンズマメ、ガラスマメ、インゲンマメ、エンドウ) の増産

を試みている。

このほかにも、2007年より全国レベルで実施されている国家食糧安全保障ミッション (National Food Security Mission) の一環としてヒヨコマメ、キマメ、緑豆、ケツルアズキ、レンズマメの大規模生産を試みている。豆類増産計画 (Accelerated Pulses Production Programme : A3P) と称される同プログラムは、伝統的に豆類の大量産地である地域を中心に実施されている。

3 インドの豆類

(1) 概観

世界の豆類の生産の主要国は、インド、ミャンマー、カナダ、中国、オーストラリア、アメリカ合衆国である。これらの国の豆類の生産量の推移を図2に示した。インドは二位のミャンマー以下を大きく引き離して、世界で最も重要な豆類の生産国となっている。

一方でインドは世界一の豆類の輸入国でもある。豆類の主要な輸入国の輸入量の推移を図3に示す。インドはもともと輸入国としては重要ではなかったものの、1970年代以降、急激に輸入量を増やし、1980年代以降は他の国を大きく引き離して世界最大の豆類輸入国となっている。現在の輸入元としてはカナダが最も重要である。

インドにおいては、豆類は、穀物類の生産量の6.5%を占めており、米、小麦、トウモロコシに次ぐ重要な作物である。長期的な豆の生産量の傾向を見ると、豆類は増加傾向にある。表3に示すとおり、2006年度から2009年度までは、生産量が1,400万台で安定している。2010年度の実生産量は前年度比24%増の1,824万台と急増し、過去最高となった。

インドにおける豆類の生産量は、2009年度から2010年度に大きく増加しているが、これは、豆類の作付面積拡大によるものであり、生産性の向上によるものではない。前述したとおり、豆類の生産は中央部や西部で盛んである。インド各州の2011年度の実作付面積並びに生産量の実績は表4

のとおり。

インドの豆類の単位面積当たり生産量は表5のとおりである。2000年代後半より単収は540～700kg/haとなっている。近年では単収が平均607kg/haと増加傾向にあるものの、世界平均の871kg/haと比較するとインドの豆類の単収は低いことが分かる。

インドは、世界一の豆類生産国であると同時に、豆類の消費量は年間1,800万～1,900万tと推定されており、世界一の豆類消費国でもある。同国の人口は現在の12.1億人から2030年には16.8億人になることが予想されている。前述の年間豆類消費量と人口増加を考慮すると、インドでは2030年までに豆類の年間総生産量を3,200万tまで増加させる必要があるとされている。

インドでは、消費量の多いヒヨコマメ、キマメ、緑豆、ケツルアズキ、レンズマメの5種が政策的観点からも主要豆類と位置づけられており、モスビーン、エンドウ、ササゲなどが副次豆類と分類されている。その他の豆類については、食用としての消費量も限定的であり、政府が推進するプログラムの支援対象にはなっていない。そのため、主要豆類については豆別の作付面積や生産量に関する統計データが存在するものの、副次豆類は生産量が比較的小さいため、「その他豆類」と分類されて統計データが取られているため、豆別の生産量のデータが存在しないものがほとんどである。

表6 インドの主な豆類

	日本名	学名	英名	現地名*	生産量 (千t)	
主要豆類	1	ヒヨコマメ	<i>Cicer arietinum L.</i>	Chick Pea	Chana	7,700
	2	キマメ	<i>Cajanus cajan L.</i>	Pigeon Pea	Arhar/Tur	2,650
	3	緑豆	<i>Vigna radiata L.</i>	Green Gram	Mung	1,630
	4	ケツルアズキ	<i>Vigna mungo L.</i>	Black Gram	Urd	1,770
	5	レンズマメ	<i>Lens culinalis Medik</i>	Lentil	Masoor	1,050
副次豆類	6	モスビーン	<i>Vigna aconitifolia (Jacq). Marechal</i>	Moth Bean	Moth, Bhriaga	480
	7	エンドウ	<i>Pisum sativum L.</i>	Pea	Matar	850
	8	インゲンマメ	<i>Phaseolus vulgaris L.</i>	Kidney Bean	Rajmash	7.4
	9	ホースグラム	<i>Macrotyloma uniflorum (Lam.) Verdc.</i>	Horse Gram	Kulth,Gahat	180
	10	ササゲ	<i>Vigna unguiculata (L.) Walpers ssp. unguiculata</i>	Cowpea	Lobia,Sontha	データなし
	11	ガラスマメ	<i>Lathyrus sativus L.</i>	Grass Pea	Khesari	
	12	フジマメ	<i>Lablab purpureus (L.) Sweet</i>	Lablab Bean	Sem	
13	ソラマメ	<i>Vicia faba L.</i>	Broad Bean	Baqla,Shivchana		
その他豆類	14	大豆	<i>Glycine max (L.) Merril.</i>	Soy Bean	Kala Bhatt and Safed Bhatt	データなし
	15	ツルアズキ	<i>Vigna umbellata Thumb.</i>	Rice Bean	Bhotiya	
	16	グアーマメ	<i>Cyamopsis tetragonoloba (L.) Taubert</i>	Guar, Cluster Bean	Guwar	

*主にヒンディー語、出所：インド農業省

(2) 豆類の主な種類

1) ヒヨコマメ (学名：*Cicer arietinum L.*、英名：Chick Pea、現地名：Chana)

トルコ南東部を起源とし、中東、北アフリカ、インドで主として栽培されている。春から初夏にかけて、白や董色の花を咲かせ、その後毛の生えたサヤをつける。サヤの大きさは35mmまで達し、中に球状の種子を含む。種子は球状であるが、吸水線付近が盛り上がっている。白、黒、茶色などの色を帯び、丸くふちを巻いた形をしてい

る。

ヒヨコマメには主にデシ (Desi) とカブリ (Kabuli) の二種類がある。デシは比較的、豆粒が小さく角張っていて豆皮が厚い。色は薄い黄土色から黒いものまでである。黒っぽい色の豆のため、インドでは「kala chana (黒いヒヨコマメ)」とも呼ばれている。デシはインドやバングラデシュを中心にパキスタン、エチオピア、メキシコ、イランで栽培されている。他方で、カブリは粒が大きく豆皮が薄い。色は白いものから

表7 ヒヨコマメの生産量（単位：万t）

州/年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
アンドラ・プラデシュ	46	35	63	65	91	86	85	72	52
カルナタカ	17	22	23	31	37	40	57	63	47
マディヤ・プラデシュ	259	255	237	241	174	279	330	269	329
マハラシュトラ	42	47	71	92	112	77	111	130	82
ラジャスタン	71	77	48	87	57	98	54	160	106
ウッタル・プラデシュ	79	67	66	50	38	56	51	53	68
インド合計	572	547	560	633	575	706	748	822	770

出所：インド農業省

クリーム色が一般的である。南欧や北アフリカ、中東で栽培されており、インドには18世紀にもたらされたと言われている。

1970～80年代まで、ヒヨコマメはハリヤナ州などインド北部を中心に盛んに栽培されていた。しかし、北部地域における灌漑施設の整備に伴い、麦やマスタードの栽培面積が拡大し、ヒヨコマメの栽培は次第にインド中央部や南部に移っていった。表7に示す通り、近年の傾向をみると、2011年には中央乾燥地帯のマディヤ・プラデシュ州で全体の43%、329万tが生産されており、続いてラジャスタン州で総生産量の14%に相当する106万tが生産されている。

ヒヨコマメは輸出も輸入もされている。2010年の統計によると主な輸入先はオーストラリア（72%）、タンザニア（17%）である。インドからの主な輸出先は、パキスタン、アルジェリア、トルコ、スリランカ、アラブ首長国連邦となっており、やはり豆の食文化の根付いた地域への輸出となっている。

2) キマメ（学名：*Cajanus cajan* L.、英名：Pigeon Pea、現地名：Arhar又はTur）

熱帯の特に乾燥地で主に栽培されるマメ科植物。若い豆果を野菜にし、熟した種子から油を採ったり、それを砕いてスープに用いたり、粉にして食べる。高さ1～3mの低木で、枝は灰色の短い毛でおおわれる。葉は3小葉。小葉は披針形で長さ5～10cm、幅1～3.5cm、両面に毛があり、裏面には黄色の小腺点もある。花は蝶形花で、長さ3～7cmの腋生（えきせい）の総状花序につく。ガクには短毛と腺点とがあり、先は5個に裂ける。

インドでは世界のキマメの9割が生産されているとされ、国内生産量の32%がマハラシュトラ州で生産されている。

3) 緑豆（学名：*Vigna radiata* L.、英名：Green Gram、現地名：Mung）

リョクトウ（緑豆）はマメ科の一年生植物。インド原産で、現在は主に東アジアから南アジア、アフリカ、南アメリカ、オーストラリアで栽培されている。日本では17世紀頃に栽培の記録がある。葉は複葉

表8 キマメの生産量 (単位:千t)

州/年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
アンドラ・プラデシュ	150	218	219	301	161	302	202	203	265
グジュラート	197.1	258	236	280	217	294	263	241	273
ジャルカンド	68	44	49	53.9	60.2	93.6	63.7	53.3	71.2
カルナタカ	240.7	199.6	290	437	280	485	315	282	529
マディヤ・プラデシュ	187.9	255.7	257	238.4	220.2	217.6	258.4	308	164.5
マハラシュトラ	777	695	658	792	815	1083	605	919	976
オリッサ	73.5	95.7	88.9	98.5	106.5	113.3	119.1	111.8	124
ウッタル・プラデシュ	341.8	405.9	380.2	377.6	304	327.9	288	202	309
インド合計	2171.9	2178.1	2578.4	2163.9	2916.4	2114.2	2320.1	2711.7	2514.6

出所：インド農業省

で3枚の小葉からなる。花は淡黄色。自殖で結実し、サヤは5~10cm、黄褐色から黒色で、中に10~15の種子を持つ。種子は長さが4~5mm、幅が3~4mmの長球形で、一般には緑色であるが黄色、褐色、黒いまだらなどの種類もある。

インドは、世界の緑豆総生産量の54%を占めるとされており、栽培面積も世界の65%を占めるといわれている。国内では、中西部に位置するラジャスタン州が総生産の4割を占めている。ラジャスタン州やマハラシュトラ州、マディヤ・プラデシュ州、カルナタカ州では緑豆の栽培は暖かい雨季に行われる。アンドラ・プラデシュ州、グジュラート州、タミル・ナド州、ウッタル・プラデシュ州では年間を通じて栽培されている。

4) ケツルアズキ (学名: *Vigna mungo* L., 英名: Black Gram、現地名: Urd)

ケツルアズキはマメ科ササゲ属アズキ亜属に所属する、つる性草本である。日本で

は主に「もやし豆」として知られている。耐乾性が強く、黒色~黄緑色の種子を着ける。インドからバングラデシュ、パキスタン、ミャンマーにかけて分布する、野生種(リョクトウと共通祖先)から栽培化されたと考えられている。インドでは古来より保存食(乾燥豆)として一般的で、煮たり煎ったり、あるいは粉に挽いて用いられる。また、未熟なサヤはサヤインゲンのように野菜として利用される。

インドではアンドラ・プラデシュ州とウッタル・プラデシュ州での生産が中心となっており、この二州で年間総生産量の4割を占めている。伝統的にはケツルアズキの栽培は雨季が主であるが、近年では成長が早く、短期間で収穫できる品種の開発により、北インドでは春に間作として栽培されているほか、アンドラ・プラデシュ州やタミルナド州の沿岸部では乾季に主要作物として栽培されている。

5) レンズマメ (学名: *Lens culinalis Medik.*、英名: Lentil、現地名: Masoor)
マメ科の一年草でヒラマメ (扁豆) とも呼ばれる。西アジア原産で、小麦や大麦、エンドウなどと同時に栽培化されたと考えられる。高さは40cmほどで、小さな豆果の中に種子が2個できる。種子は丸くて扁平な形で、直径4~9mm。カレーやスープ、煮込み料理など、インド料理やイタリア料理、フランス料理で使用される食材のひとつである。インドではダールとして調理されるのが一般的である。

乾季に栽培されるレンズマメは、生産量の約半分がウッタール・プラデシュ州で生産されており、マディヤ・プラデシュ州、ビハール州がそれに続いている。

2011年度には、445tのレンズマメが輸出されたのに対し、11万8,000tがカナダやアメリカから輸入された。インドからの輸出先は主にアメリカやバングラデシュ。カナダやアメリカからは主として加工されていないレンズマメが輸入されており、イン

ドからアメリカへは加工されたレンズマメや有機栽培されたものが輸出されているようである。

4 豆類の生産

(1) 作付体系

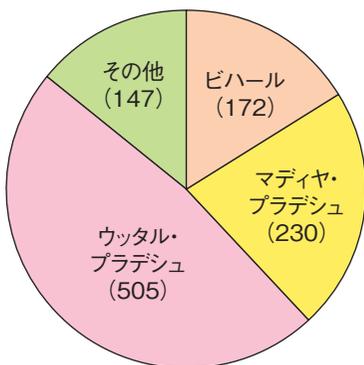
標高の高いヒマラヤ山脈地帯を除き、インドでは通常、二毛作が行われる。インドでは農業の季節は大きく雨季と乾季 (または冬期) に分けられる。雨季作は、5月後半から7月中旬に作付けが行われ、同じ年の10~11月に収穫される。乾季作は雨季作のあとの10~11月に作付け、翌年の5~6月ごろに収穫となる。

五大主要豆類のうち、ヒヨコマメとレンズマメは通常、乾季にのみ栽培され、キマメは雨季のみに栽培される。緑豆とケツルアズキは年間を通じて栽培されることが多い。農家が所有する農地面積や豆類を栽培する目的により、豆類は単作または混作や間作として行われる。豆類の単作は通常、農地面積が比較的大きく、商業目的で栽培する時に穀物の裏作として行われるのが一般的である。しかし、インドにおいては豆類の栽培は間作であることが多い。インド豆類研究所では、地域別に表9のような間作を推奨している。図5は典型的な作付け体系の例である。

(2) 品種改良と種子

インドにおける豆類の研究と開発のため1993年に設立されたインド豆類研究所 (IIPR) の本部はウッタール・プラデシュ州のカンプル市だが、国内に複数の支部を

図4 レンズマメの生産量 (千t)



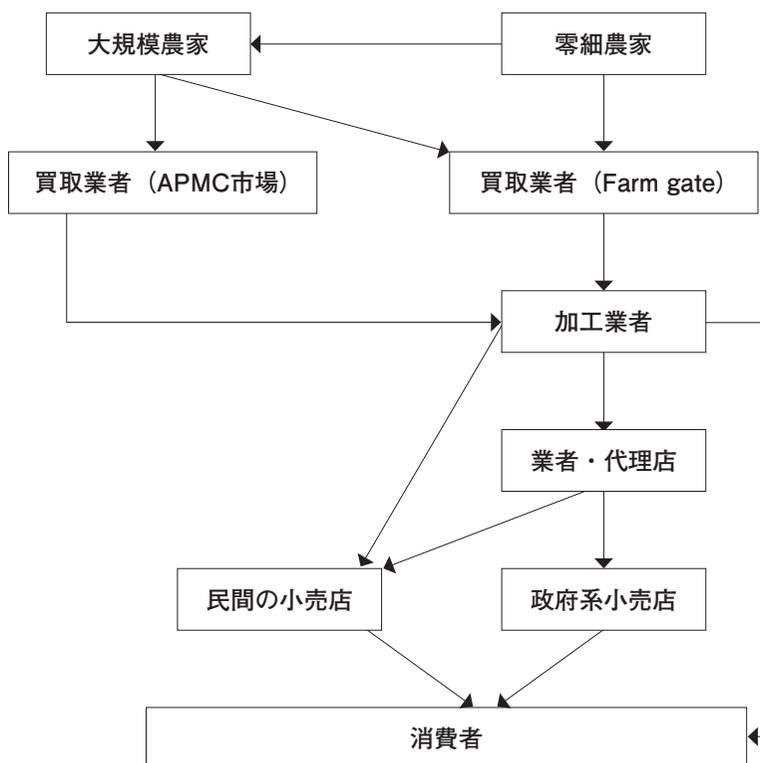
出所: インド農業省

表10 各地の豆類取引価格（2013年5月）

単位：ルピー/100kg

豆類	最低取り引き価格	最高取り引き価格
ヒヨコマメ	3096 (ラジャスタン)	5596 (アッサム)
ケツルアズキ	2900 (ポンディチェリー)	5885 (ケララ)
ササゲ	1974 (タミル・ナド)	8378 (グジュラート)
エンドウ	1128 (ウッタルカンド)	4832 (ハリヤナ)
インゲンマメ	1052 (ウッタルカンド)	5239 (メガラヤ)
緑豆	2895 (チャッティスガール)	7329 (アッサム)
レンズマメ	2879 (チャッティスガール)	4735 (マハラシュトラ)
大豆	3539 (チャッティスガール)	5475 (マニプール)
キマメ	3125 (マディヤ・ブラデシュ)	6845 (西ベンガル)

図6 豆類の流通ルートの事例



や野菜が主であるが主要豆類にも設定されている。

2002年から各州で改正された農産物マーケティング委員会法（Agricultural Produce Marketing Committee (APMC) Acts）に基づき、各地で州政府が運営する農産物の取引所が設立された。取引所には生産者や業者が集まり、日々取引が行われる。農家から農産物を買取る卸業者は事前にAPMC委員会に登録申請をし、取引免許証を取得することが義務付けられている。各地の気候や品種、食文化による需要の違いにより、卸売値は各地で大幅な差がある（表10）。表10は2013年5月の最低・最高取引価格を示したものである。

最低支援価格やAPMCの設立は仲買人による農家の搾取を回避するために設立された。しかし、豆類の取引は米や麦と異なり、いまだに伝統的な流通ルートを通じた売買が一般的である。その背景には、農家がAPMC市場まで生産物を運搬するコストと労力が膨大であると感じていることや、APMC市場まで運搬した場合でも、保管場所の不備なども理由に挙げられる。さらに、APMC市場での取引では、支払いが現金ではなく現金回収までに時間を要する小切手での支払いであることも、農家が利用しない理由の一つである。図6は農家から消費者までの豆類の複数の流通ルートの事例を示したものである。

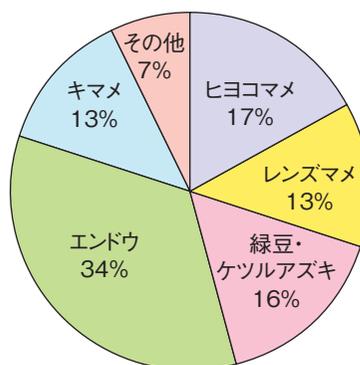
6 豆類の貿易

国内の栄養不足と国内生産の需給ギャッ

表11 豆類の輸入

	2009	2010	2011	2012
輸入量 (千t)	3,702	2,732	3,459	3,996
金額 (百万 ルピー)	104,458	72,890	93,100	132,236

図7 豆類の輸入内訳（2012年度）



出所：インド商業省

プの解消のため、インドでは豆類の輸入を推奨する一方、輸出については消極的な姿勢を見せてきた。

(1) 輸入

豆類の輸入については、政府の定める品質基準を満たしているものであれば規制はない。2009年から2012年までの豆類の輸入量と金額は表11のとおりであり、近年では300万t前後の輸入があることがわかる。

図7は2012年度に輸入された豆類の内訳であるが、近年の動向は一貫して同様であり、エンドウの輸入が最も多くなっている。続いて、ヒヨコマメ、キマメ、レンズマメである。インドの貿易統計上、緑豆とケツ

ルアズキが同一分類されているため、詳細な内訳はわからない。

エンドウの輸入はその7割以上がカナダからである。ヒヨコマメの主な輸入先(2010年)はオーストラリア(72%)やタンザニア(17%)である。キマメはミャンマーからの輸入が主であり、続いてタンザニア、モザンビーク、マラウイなどからも少量ながら輸入されている。緑豆とケツルアズキの主要輸入先もミャンマーであり、2009年度は2割を、2010年度には7割が同国からの輸入だった。続いてオーストラリアや中国からの輸入もある。

(2) 輸出

インドでは、国内の需給ギャップ解消のため、2006年に豆類の輸出が禁止された。その後も国内の生産量などを考慮し、今日に至るまで輸出禁止令は断続的に実施されている。2013年3月にインド商業省は、同令をさらに2014年まで延長するとしつつもカプーリヒヨコマメと特定の政府機関に認証された有機豆類の輸出を年間1万tまで許可するとした。しかし、実際のところ少量ながらも他の豆類の輸出もされている。特に、ミャンマー、バングラデシュ、パキスタン、中国とは以前から国境貿易が行われている。国境貿易で輸出入される豆類についてそれなりの量と金額であると考えられるが、実態は把握されていない。

輸出が最も多いのはヒヨコマメであり、輸出量の7割を占める。インドからの主な輸出先は、パキスタン、アルジェリア、トルコ、スリランカ、アラブ首長国連邦となっ

ており、やはり豆の食文化の根付いた地域である。そして大豆はアメリカやカナダが中心であり、日本にもいくらかの輸出が確認されている。

表12 豆類の輸出

	2009	2010	2011	2012
輸出量 (千t)	124	226	214	268
金額 (百万 ルピー)	4,608	9,078	11,789	15,516

出所：インド商業省

7 調査結果の概要

- (1) インドは、豆類の生産・消費ともに世界第一位の豆大国である。豆類の消費量は、年間1,800万～1,900万tと推定されるが、近年人口の急激な増加に伴い、さらに増加している。
- (2) 豆類は、インドにおいては、米、小麦、トウモロコシに次ぐ重要な作物である。豆類の生産量は、近年1,400万t台で安定してきたが、2010年度には急増し、過去最高の1,824万tに達した。
- (3) 豆類の需給ギャップ解消のため、2006年よりインドでは豆類の輸出規制が実施されており、豆類の輸出は極めて限られている。
- (4) インドはもともと輸入国としては重要ではなかったものの、1970年代以降、急激に輸入量を増やし、1980年以降は他の国を大きく引き離して世界最大の豆類輸入国となっている。近年では国内需要量の1/6に相当する年間300万t程度の

豆類が輸入されており、輸入元としてはカナダが最も重要である。

- (5) 豆類は、インド中央部や西部を中心に栽培されており、マディヤ・プラデシュ州、ラジャスタン州、ウッタル・プラデシュ州、マハラシュトラ州等が主要産地

である。

- (6) インドでは、消費量の多いヒヨコマメ、キマメ、緑豆、ケツルアズキ、レンズマメの5種が政策的観点からも主要豆類と位置付けられている。